

「動いていいか」

「いいよ」

ずりずりずり、真人がいったん腰を引き、またずぶりと奥を深く貫く。

「んっ！」

千香はつい眉をしかめて声をあげる。鈍い痛みは変わらずあるが、異物感、圧迫感のほうが悪しかった。

「んっ！ んっ！……」

つづいて二度、三度、真人が出し入れを繰り返した。突かれるたび、大きな乳房がぶるぶる揺れた。

「千香」

真人の手がたっぷりした乳房をつかむ。乳房を持ちあげるようにぐいぐい揉んで、腰を動かし、真人のものが千香の中で暴れた。肉の壁に、肉の棒が擦りつけられ、摩擦で熱くなるような気がした。乳房が真人の手の中で歪んだ。勃起した乳首が、指の隙間からびよんと飛びでた。

「んっ！ あうっ！ く、あんっ！」

少しずつ、真人の動きが速くなってくる。ズチュツ、プチュツと、挿入されたところ



ろから、気泡がつぶれるような音が聞こえる。入れたまま、中で先だけがすばやく動く、子宮の入り口を叩かれているようでゾクゾクした。どうしよう。この中に、真人君が全部出しちゃったら。私、生理が不定期だから、いつが危険日なのかわからないのに。

「ひいんっ……」

ズンズンズン。突かれながら掻きまわされ、真人の動きはどんどん速く、規則的なリズムになっていく。射精の瞬間が近づいている。千香は妊娠の恐怖を感じて、揺すられながら身を固くした。

「うっ」

それが逆に、中で真人を締めつけたらしい。何か出されたような気がした。

「あ」

どうしよう。私。私……。

「千香」

ふっと、真人が動きをとめた。

「大丈夫だよ。いまの違う。中に出さないから」

「……あ……」

安堵と、不安を見抜かれた恥ずかしさと、氣遣^{きづか}つてくれる真人への、申しわけないが嬉しい気持ちで、千香はつい、じわっと涙ぐんでしまった。

「ごめんね」

真人は黙ってキスしてくれた。大好き。真人君。今度は、ちゃんと体温つけて、大丈夫な日を計算するね。

「じゃ、いいかな」

「うん……あつ、んっ、うんっ……」

千香の上で、真人が再び激しく動く。今度は、千香の膝を抱えて大きく開かせ、乳房の横あたりまで持ちあげた。ずぶりと、ひとときわ深い感覚。目を閉じて、つい口を開いて味わってしまう。気持ちいい、とは言えないけれど、不思議な充実感がある。自分のそこが、男のものを受け入れるための器官なのだと、直接身体に教えられ、女の子だと納得していく、染みこむような充実感だ。

「ひんっ！」

そこで、真人がまたクリトリスを刺激した。驚いて、千香は内部をぎゅうっと強く収縮させる。気持ちよかった。いじられながら、挿入されて内部に肉棒を擦りつけてもらうと、充実感が快感に変わる。真人が動き、放りっぱなしの乳房が激しく上下に

揺れた。ぶるんぶるん。ああ、おっぱいが揺れるのも気持ちがいい。

「出すぞ」

「うん」

出して。千香を使って、真人君の気持ちいい精液を、千香の身体にいっぱいかけて。目を閉じて、千香はその瞬間を待ちながら、そっと、自分で自分の乳房に触れた。

「揉んで、千香」

すぐに気づいて、真人が千香に求めてくる。うなずき、千香は手に持ちきれない大きな乳房を、中に寄せて揉みながら乳首をつつく。

「ああっ、いい」

真人が切迫した声をあげた。千香もいい。ああ、もうずっとこのままセックスがいい。真人君と、一つになったまま、いっぱいいいっぱい、射精してもらって――。

「く」

「あっ」

ふいに中からずるりと抜けて、真人の体が千香の上に落ちた。

「あ……」

ときどきときどき。真人の速い心臓の音が、千香の胸にも伝わってくる。生温かく、

すぐに冷たい感触が、お臍へその上にひろがっていく。真人が千香の上で達していた。

……しちゃったんだ。千香はしばらく、真人を乗せたままぼうっとしていた。真人とすごく、親しさが増して、大人っぽい恋人同士になれた気がした。